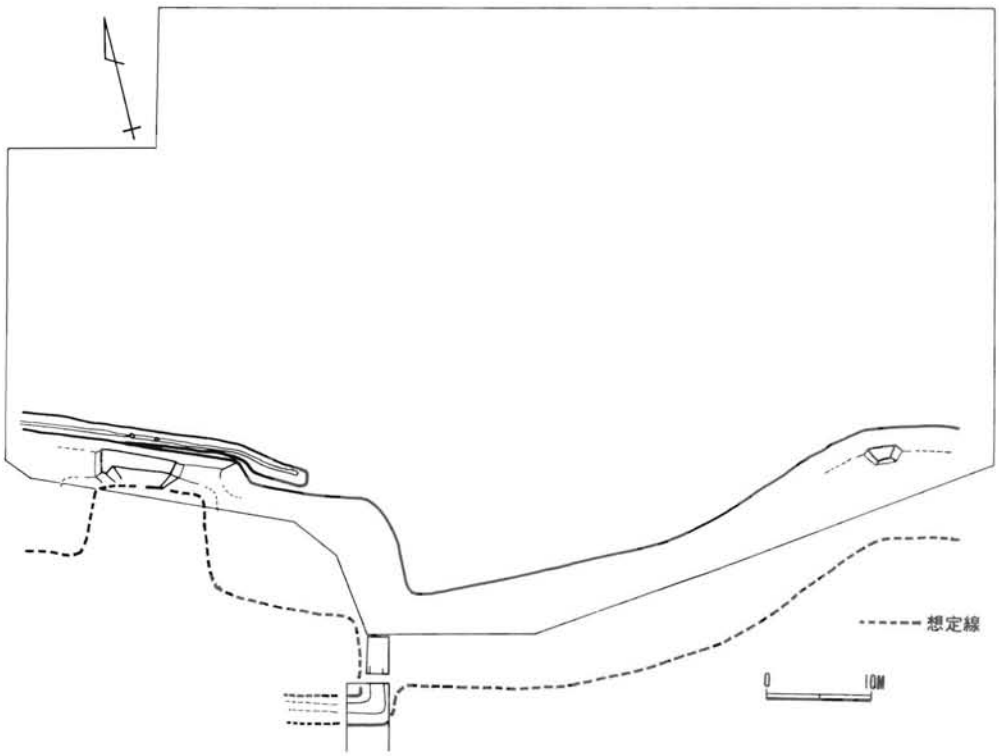

第140図　1・3号溝址想定図

市史編さん室の調査で判明した約12mという上幅の数値をもとに作成したのが第140図である。あくまでも想定であるが、1号溝址は（E－2・3）Gで幅を減じているので、この部分の南側は屈曲して袖となり、ここに虎口を開いたと考えられる。また、3号溝址は馬出しの堀とすることができよう。1・3・5号溝址は、その位置や追手のある部分など「柏の城」城郭図とほぼ一致し、「柏の城」の付属施設であったことは間違いない。

註1　『館村旧記』は、館村（現志木市柏町・幸町・館）の名主であった宮ヶ原仲右衛門仲恒が享保12（1727）年から同14（1729）年にかけて、正徳（1711～16）・享保年間の村の状況や村の歴史を記したものである。

第5節　「柏の城」について

「柏の城」については、当時の史料が皆無といってよいほど無く不明な点が多い。城名が記録の上で現われるのは『館村旧記』が初見であるが、その内容にどこまで信憑性があるかは別にして、関連のある部分をみてみると、「田面長者以来年数荒間敷之事」の部分で、

（前略）さて亦当初柏城、文明年中の比田面長者の住居ありし跡を城に築きて大石信濃守殿居城となれり。而も相州小田原北条家の幕下にして、小田原十一ヶ城の内也。（後略）

とある。これに関しては、

○大石氏で信濃守を名乗った者は、顕重・定基・照基の3名いて、文明年間（1469～86）に活躍したのは高月城主であった顕重が該当する。

○大石氏が北条氏に服属したのは天文15（1546）年の大石定久の時期からである。

次に「館柏之城軍の事」の部分で、

抑館柏之城は昔田面郡司長勝殿の住みたまふ跡也。此の城人皇百六代後奈良院の御守、天文年中の比は大石信濃守政吉殿の居城たり。（中略）時に越後の国の官領上杉謙信輝虎卿、小田原北条氏康卿を攻めんと大軍にて河越より武蔵野辺に押し寄せらる。その刻当城へ寄せ来たると聞へしかば、籠城の用意として兵糧を込め、或は堀を浚ひ仮り塀を掛けさせ城戸逆母木を引いてぞ待ちかけたる程なく、上杉勢押し寄せ来たりして鬨の声をあげたりける。城中には兼ねて期したる事なれば、同時に鬨をぞ合はせけり。（後略）

とあるが、これについては、

○大石氏系図には政吉という名はない。天文年中（1532～54）に信濃守を名乗ったのは定久の弟である定基が該当する。

○このような戦いがあったのかどうかも問題になるが、これにより「柏の城」は落城し、大石信濃守は討ち死する。しかし、上杉謙信が小田原の北条氏を攻めたのは永禄4（1561）年のことで史実と相違するし、定基の没したのは元亀2（1571）年とされる。

以上が『館村旧記』に現われる「柏の城」についての主な記述である。ここで、他の史料にあたってみると、まず『新編武蔵国風土記稿』では、

館迹　長勝院ノ東ノ方ニアリテ、同寺ノ境内ヘモ少クカヽレリ。今ハ畑トナリシカト、虚堀ノアト土手ノ状ナトワツカニ残リテ、当時ノサマ髣髴トシテ見ルヘシ。土人言、遠カラス世マテモ土手・堀ナト全ク存セリ。其後林ヲヒラキ畑ヲオコセシ時コホテリシニヨリ、右ノ状更に変セリ。今八幡祠ノアル所館ノアリシ所ナリトソ。イカサマ北ノ方ニ崖アリテ、広サ二町ニ二町半ハカリノ要害ノ地ナリ。昔大石越後守コヽニ居レリ。此人ハ小田原北条家ノ家人ナリシカ、天正十八年太閤秀吉ノ為ニ亡シト。按ニ大石越後守ハ多磨郡滝山城主大石信濃守カ一族ナルヘシ。天正九年北条武田両家ノ間和議破レケル時、駿河国分国境目ノ押ヘトシテ、同国獅子浜ノ城ニ越後守ヲ籠ヲシキコト、小田原記ニ載セタリ。同十八年上方ノ大軍小田原ノ城ヲ攻シ時モ、コノ人同シ城ニアリテ終ニ寄手ノタメニ城ヲ明渡シケルヨシ北条五代記等ノ書ニ見エタリ。サレハ此時ヲノカ館モ敵ノ為ニウチ亡サレシナラン。

とあり、

○『新編武蔵国風土記稿』の編さん段階では、堀・土塁などが僅かではあるが残っていた。

○大石越後守直久が最後の城主であった。

○大石越後守は天正9（1581）年に駿河国獅子浜（沼津市）城に入り、天正18（1590）年にはこの城について、寄せ手に城を明け渡しているから、館もこの時に滅んだのであろう。

としている。

次に、嘉永6（1853）年に書かれた渡辺渉園の『秩父日記』には、

十四日　はれ　館村長勝院といふハ　廻国雑記に見えたる大石信濃守の館の跡なるよし　十玉院より聞おきしかは、（後略）

とあり、

○長勝院が『廻国雑記』に載る大石信濃守の館跡であると十玉院から聞いた

というのである。

ところで、本山派修験の大本山聖護院の門跡である道興准后が、文明18（1486）・19年に書いた紀行文『廻国雑記』には、「柏の城」に関係するとおぼしき記述がある。つまり、

（前略）

さゝいをたちて武州大塚の十玉が所へまかりけるに、江山いくたびかうつりかはり侍りけん、其夜のとまりにて、

（中略）

あるとき大石信濃守といへる武士の館に、ゆかり侍りて、まかりてあそび侍るに、庭前に高閣あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや、遠景すぐれて、数千里の江山眼の前に尽ぬとおもほゆ。あるじ盃を取出して、暮過るまで遊覧しけるに、

（中略）

十玉が坊にて人々に二十首よませ侍るに、

（中略）

河越といへる所にいたり、最勝院といふ山伏の所に一両夜やどりて、

（中略）

此さとに月よしといへる武士の侍り。いささか連歌などたしなみけるとなん、雪の発句を所望し侍りければ、言つかはしける、

（中略）

これにて百韻行し侍りけるとなむ。これより武士の館へまかりける道に、うとふ坂といへる所にてよめる、

（中略）

すぐろといへる所にいたりて名に聞し薄など尋ねてよめる、

（中略）

又野寺といへる所爰にも侍り。これも鐘の名所也といふ。

（中略）

此あたりに野火とめのつかといふ塚あり。

（中略）

これを過ぎてひざおりといへる里に市侍り。

（中略）

十玉が坊にて三十首の歌詠侍りけるに、

（中略）

ところ沢といへる所へ遊覧にまかりけるに、

（中略）

この所を過てくめ〳〵川といふ所侍り、

（中略）

武州大つかといへる所に住侍りける時、

（中略）

十玉が坊より紅梅の色こきをはじめて見せければ、

（中略）

野遊のついでに大石信濃守が館へ招引し侍りて、

（中略）

むさしの丶末に浜さきといへる里侍り、

（中略）

此ほどなが〳〵住なれ侍りける旅宿をたちて甲州へおもむき侍りけるに、

（中略）

かくて甲州にいたりぬ。

（後略）

とある。

道興が武州大塚の十玉坊賢承の所に来たのは太陽暦で文明18年12月末か翌19年の1月初め頃と考えられ、2月末か3月初め頃に甲州に旅立つわけであるが、この間十玉坊を基点にして近隣を訪ずれ歌を詠む生活を行う。

ところで、十玉坊のあった武州大塚については諸説があって、現川越市南大塚、現富士見市南畑・水子、志木市大塚（現幸町2丁目近辺）などがそれであるが、この3地点は距離的にもさほど遠くない。

次に「大石信濃守といへる武士の館」であるが、この時期信濃守を名乗ったのは顕重で、大石氏系図によると長禄2（1458）年から高月城（八王子市）に入っているので、「武士の館」とは高月城をさすのが妥当のようにみえる。

しかし、ここで道興が十玉坊に滞在してからの足取りをみると、地名のわかるものでは、

十玉坊―大石信濃守の館―十玉坊―河越―月よし（川越市）―うとふ坂（川越市）―すぐろ（坂戸市・鶴ヶ島町）―野寺（新座市）―野火とめ（新座市）―ひざおり（朝霞市）―十玉坊―ところ沢―くめ川（東村山市）―大塚（十玉坊）―大石信濃守の館―浜さき（朝霞市）―十玉坊―甲州

となる。これらの外出は、地名のわからないものを含めて大部分が野遊びのたぐいで遠出をしていない。文中に「野遊のついでに大石信濃守が館へ……」とあり、十玉坊と大石信濃守の館が近い距離にあった可能性が強い。十玉坊のあった場所を考えると、高月城のあった現八王子市高月はやや遠隔の地の感がある。

大石氏系図によると顕重は永正11（1514）年に死去し、その子定重が家業を相続するわけであるが、定重はこの時すでに満47歳である。

道興が十玉坊に滞在していたと同じ頃、当時の文化人である万里集久が江戸城に逗留していた。彼の執筆した詩文集『梅花無尽蔵』巻2に、大石定重が長享1（1487）年に館亭の命名を集久に依頼し、「万秀斎」の名を得たという下りがある。その中に、

（前略）武蔵目代大石定重請之、（後略）

また、巻6には

武蔵刺史之幕府、有爪牙之英臣、是日大石定重、廼木曽源義仲十葉之雲孫也、武之二十余郡悉属指呼、（後略）

とある。つまり、長享1年の段階では定重は武蔵目代であり、武蔵の二十余郡を支配していたのである。

大石信濃守の館が文明18・19年当時どこにあったかについては諸説があって、当「柏の城」もその候補にあがっている。想像の域を脱しないが、この時期顕重はすでに実権を定重に譲り、高月城を出ていたのではなかろうか。その場合、十玉坊に距離的に近い「柏の城」を居城にしていたことも十分に考えられる。